
異世界で生きる

神山夏彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で生きる

【Nコード】

N9101T

【作者名】

神山夏彦

【あらすじ】

何かと不幸な人生をイケメンハーレムの友人のせいで送ってきた主人公、漣海人。しかも最後はその友人によつて殺され、それを哀れんだ神達は力を与えて異世界へと飛ばしてくれた！とにかく作者の好きなものを入れて書く小説です。技とか物とかそういう何でも出てくるような物やチートが苦手な方はご注意ください。改訂版です。

ぶろろーぐ（前書き）

改訂版です。これは数行増やした程度になります。

ぶろろーぐ

ハーレムと言うものをご存じだろうか？小説やゲームなどでよく取り上げられ、イケメン主人公が美少女達に囲まれてうはうはな生活を送るものだ。しかもそういう主人公はえてして鈍感なものだ。そのせいでいろいろと反感をかったりする。しかも周りの人間も巻き込んで。まあ俺が何を言いたいのかと言うと。

「龍也様〜!!」

「龍也くう〜ん!!」

「うわあああー!! 助けてくれ海人ー!!」

ハーレムは実在するということだ。ついでに言えばそれは俺じゃない。学校において今現在目の前で美少女二人に追いかけている腐れ縁の友人、周防龍也の事だ。容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群、何かと事件やらに関わってフラグをたてる小説から出てきたような主人公。現在校内の三分の二の女子生徒及び教師を数名を落としている。

「はあ……龍也、いつものか？」

「ああ！助けてくれ！」

俺の背中に隠れるヘタレは何故か今までずっと学校から何まで一緒だった。虐待を繰り返してきた両親は五歳の時に蒸発し、親戚内をたらい回しにされて、目付きが悪いという理由で結局は孤児院に入った。そんな中で唯一友達になってくれたのがコイツだったわけ。まだ小さくて純粋だった俺はとても嬉しかった事を覚えてる。後に後悔の日々が続くわけだが。

そして友達として遊んでいく中であれよあれよとフラグを立てていくコイツは、同時に敵も多く作った。理由は嫉妬、怒り、中には彼女を取られたという同情を禁じ得ない理由もあった。

だがコイツは持ち前の鈍感スキルでそれに気づかず、どういうわけかいつも近くにいる俺に標的が移った。苛めや暴力、酷いときには殺されそうになったりもしたものだ。

そのため俺が関わるのを拒否しようものならより凶悪な死亡フラグを持って現れるから余計タチが悪い。ヤクザな人達の事務所に女の子が拐われたから助けてほしいだの、暴走族に女の子と絡まれたから助けてほしいとようやく一人暮らし出来るようになった家にわざわざ押し掛けてきたりした。しかも無理矢理連れていかれて、それらを何度も病院で死にそうになりながらも全てなぎ倒していった俺は頑張ったと思う。龍也は一度も見舞いに来なかった。というか来させなかった。

先程彼女を取られたという奴がいたと言ったが、同様な事も俺に起

きている。初恋で最初の彼女は他の中学校の生徒だった。本当に好きで、俺も彼女の気持ちに応えようと頑張ったのだが、付き合っで一ヶ月も経たないうちに俺の知らない所で転けた時に龍也にあり得ない程優しく介抱されたとかで

「好きな人が出来た」

とそそくさと去っていった。その時は俺がいけなかったのだと思い、涙を飲んだが後に龍也本人に俺の彼女を介抱したと言われてわかった。

次の高校に入ってからが酷かった。龍也の後始末も次第に規模がでかくなってきて、肉体的にも精神的にもヤバかった時に彼女が来た。結果から言えば俺は龍也に近づくためのダシに使われ、無理だとわかれば何もなかった様な態度を取られた。よく心がもったと思う。

だがまたもやコイツは持ち前の鈍感スキルでそれに気づかず、本人は冗談のつもりだっただろうが笑いながら

「バツカでー！！フラれてやんのー！」

と、そう言ってきた。この時ばかりは腸が煮え繰り返りそうだったが、事情をわかっているクラスメイト達のお陰で何とかなったのを覚えてる。何だかんだで最初の友達というのが強かったのだと思う。

まあ、俺の主観だし、嫉妬だとか言われればそれまでだけど。

そしてこんなくそつたれな……いや、こうして生きていられるだけ幸運なのかもしれない……人生を送るちよつと荒事処理に慣れてしまつて目付きが悪い以外の他の能力は普通な俺、漣海人はこの日がこの世界で最後の日となるとはこの時思つてもみなかった。

ぶろろーぐ（後書き）

今度は完結させたいです！

ぶろろーぐ2（前書き）

能力を増やしました。あと説明も

ぶろろーぐ2

唐突だがその日の放課後、俺は死んだ……らしい。曖昧な言い方になっってしまうが、俺はその瞬間の記憶がなく聞いた話だからだ。そして聞いたのがなんと、神様。

「自分の今の状態を理解したか？」

「あ、はい。ありがとうございます」

よく二次創作小説に出てくるおちゃらけた神様ではなく、めっちゃくちゃ威厳と威圧感のあるローマな格好の巨人が言う。今俺の前には半円状に椅子がならび、その全てに巨人——全部神様——が座っている。その真ん中で俺は神様曰く、魂のみの状態でここにいる。体の感覚が無いのが何よりの証拠だ。

「なによりだ。さて、本題に入ろう」

真ん中の神様がそう言って一拍いれる。そうそう、今までのことは全部この神様に教えてもらったんだ。そんでもってやっぱり俺の死因は龍也だった。結局あの日の放課後は一緒に帰ることになり、その時に反対車線で車に引かれそうな子供がいたんだ。それでやっぱり龍也は助けに行く訳だが……その時に事もあろうに俺を突き飛ばしやがった。当然押された方向に倒れる訳だが、その時に丁度きて

いたトラックに出ていた頭だけを弾き飛ばされてドボン。最後の最後まで、あいつは俺の疫病神だったようだ。

「我々は今までのお前の人生を見てきた。最初から最後までな。それを見た我らの感想は……」

「感想は？」

「おかしい、という結論が出たのだ。正直に言えば、お前は本来何の不自由もなく暮らし、あんな酷い恋愛などしない普通の日本人になっているはずだったのだ。それが何故こうなったかを調べてみると、お前の友人が全ての元凶だったことがわかった」

友人……龍也だろう。100%。

「まだ赤子だった時点から、というか前世等も含めてお前の全ての幸運や能力はその友人に持っていたのだよ。全てをな。とはいえ魂は基本的に死後はリセットされる。今までは飛び飛びだったようだ、今回は連続してあったようだ。お前もおかしいとは思っていただろう？」

「はい。何度この運命を恨んだことが……」

男子生徒と彼氏持ちの人達は優しかったけどな。泣きなくなっただ。ってか前世って……規模がでくないか？しかも話的には俺の魂はかなり苦労してるみたいだし。

「だろうなあ。俺だったらあそこまでされたらキレて殺して思うぜ？しかも知ってるか？今その友人とやらはお前を突き飛ばしたのを自覚してなくて、お前が勝手に突っ込んで死んだって皆に言いふらしてるんだぜ？カツコ悪く、無様にな。何でかは知んねえけどよ」

「更に、彼が酷く曲がった嘘を言ったためにあなたへの周りの好感度は一気に下がりました。むしろ彼の人の助けを邪魔したということ」

「しかもその男、遺品だとか何とか言って堂々とお主の持ち物を盗んでいきおったわ。周りの女共も便乗して、まあ女共は男の制止も聞かずといった具合じゃったが……とにかくお主の家はもぬけの殻じゃ。全く、信じられんわい……」

いろんな神様達が言ってくれる中、俺は呆然としてしまう。俺が今まで無理矢理とはいえ体を張って助けたりしてやったにも関わらず、その初めてのお返しがこれか……初めての友達、何だかんだ行ってきたが腐れ縁とはいえ大切な友人と思っていたのは、俺の勝手な考えだったのか？

「心を強く持て、少年。言葉が発せなくなっているぞ？大丈夫さ、少年には俺達がついてる」

真ん中の神様から右に二つ離れた見た目青年の神様がそう言うてくれて気付いた。思った以上にダメージが強かったみたいだ。これは俺話せるのかな？と考えているとその横の綺麗な女性が口を開く。

「大丈夫、あなたの伝えたい事はしっかりと聞こえてるから。そんなのがキ、警察の女の子落としてそのまま行けばあなたのお金にまで手をつけそうだったけど、それはなんとかしといたわ。どうする？」

……ありがとうございます。俺の貯金はお世話になった孤児院に届けておいて下さい。あそこにいるときが一番幸せでしたから……。

「……そう。ん、すぐにいくようにしといたから、安心しなさい」

はい。本当に、ありがとうございます。

「ふむ、これで一通り現世での事は片付いたか？」

お陰さまで。

「うむ。ならば次の話に移る。我らはお前をひどく哀れに感じた。故に、もう一度生きるチャンスをやろうと考えたのだ」

マジですか！でも、俺なんかより不幸な子なんてかなりいますし……
まずはそういう子を――

「案ずるな。そういう奴は死んだら優先的に転生させている。そしてお前は……特別だ。だが、強化した肉体と共に蘇らせるだけになる。その友人と共に召喚という形でな」

「この戒めのような繋がりには、完全にあなたという存在を消し、違う人間として生きるほかに断ち切る方法がないのです。魂まで繋がるこの鎖は、管理者たる私達神ではなく私達の誕生も含めた生産者である世界による初期設定のようなものですから、その子たる私達にはどうすることもできないのです。しかし、私たちはあなたをあなたのままいさせてあげたい……勝手なことですが、許してください」

……いえ、俺が俺のままでいれるというだけで破格なんでしょう？
なら俺に文句を言うことはできません。それに、生き返れるってだけですごいことじゃないですか。感謝こそすれ、その逆はありませんよ。

「そう……ありがとう」

そういえば、召喚って言ってましたけどそれってどういうことなんですか？

「うむ。お主が死んでから一カ月経ったのだが、その友人が……あれじゃよ、勇者召喚されたのじゃ。よくある剣と魔法じゃよ。しかし本来必要な勇者は一人。お主にはなにかしら起きるじゃろうな」

違う世界ということですか……それに初っ端から盛大に巻き込んだんじやってくれますね。

「飲み込みが早くて助かるよ。彼とはどうするつもりだい？」

なんだかんだまた最終的には巻き込まれると思いますが……最初は自分であいつから離れて頑張ってみます！

「フフ、良い返事です。ですがあなたの行く世界には危険が多いのでいくつか力をつけてあげます」

やっぱり早速危険有いですか！行く前から不安がいっぱいですよ！

「だから力をつけてあげるって言ってんでしょ。ほら、アレス。あなたの仕事よ」

「考えるの面倒だな……お前の家に有ったものの力を全部詰めとくぞ。道具も使えるから大丈夫だ」

えっ？アレス！？

「話進まないから無視。ヘラクレース！」

「あはは……僕からは、その力に耐えられるだけの肉体を送ろう」

ちよっへ「うるさーい！次っ！」……。

「じゃあこのハデス様からは冥界の王として好きなときに死ねる権利をやるっ！と言っても不老だけで不死ではないから気をつけるよ？あとは……そうだな、ハデス様印のかっこいい刺青でもいいれてやるか。これでお前は闇に好かれるだろうよ。光の頭の固い連中には嫌われるだろうがな」

「このポセイドンからは水に好かれる力を与えよう。これで慣れれば水の中では私の次には強くなれる。息も出来るぞ。しかも汝は水に属する名を持っているからな。より強化され、水の生き物にも好

かれるだろう。好きなように使役出来るということではないがな。彼らの方から進んで協力をしてくれるはずだ」

「私、メテイスからはそれら全てを扱うための知恵とその世界の魔法関連の知識を授けます。あと、文字や言葉についても付けておきましょう」

……もう何も言いませんっ！言えませんっ！後でサイン下さい！

「このヘファエストスからは収納用の腕輪をやるう。お主以外には使えぬし、持てぬので安心すると良い。何でも入るし、念じれば出てくるからな……皆のサインもここに入れとこう」

家宝にしますっ！

「えっと、ざっとこんなもんね。あ、私アテナからは……そうね、最強の守りを使えるようにしとくわ。じゃあ、お父様あとお願いします！」

「うむ。我らはお前をスクリーンで見えておるからな。頑張ってこい」

ええっ！？最強の守りって！？それにスクリーン！？って消えてく……っ！

「まあ、僕達も案外暇なのさ。行ってらっしゃい」

「俺達を楽しませてくれよ！暴れてこい！」

と、とりあえず……行ってきまーす！

一話（前書き）

まず始めに、旧版での感想でありましたが、主人公が嫌いだとか今更何を書いてんだとかいう感想は止めていただきたい。私は私なりに好きで書いていますし、うちの主人公はこういう人間です。

不自然な点やこうすればいいという指摘、疑問点などの感想、批評は受け付けます。それは大変有り難いので。ですが、単に面白くないとか嫌いというだけというのはやめてください。人それぞれ好き嫌いありますから私の小説で不快になる方も出ているのかもしれない。そこは私の力量不足だろうと思いますので、謝罪します。更新遅いですし。

しかし、感想でそのような事を書かれるのであれば、具体的にどう面白くなかったか、こうしたらいいんじゃない？という事を加えて頂きたい。正直書く気が失せます。私は私なりに皆さんに少しでも楽しい時間を提供したいのです。嫌なら、見ないでください。他にもここには素晴らしい小説が数多くあります。

まだまだ未熟な私が偉そうに言えることではないですが、そこはご理解頂きたいです。

長々と失礼しました。これから皆さんに楽しい時間を提供できるように努めていきますので、よろしく願います。

一話

温かい光と共にどこかふわりとした感覚の後に頬にひんやりとした鉄のようなものが当たる。そして手、足、胴と徐々に身体が構成されていくのがわかる。不思議なことにそれに不快感は全くと言っていいほどなく、ああ、身体が手に入ったなあとどこか他人事のように感じてしまった。胴の構成中に背中が痛かったが、構成による痛みとかそんなのだろう。ちなみに周りは光に包まれていて俺がこうして構成されているのは見えていない。召喚中、ということだろうか。

「かつ、海人！？何で！？それにここどこだよ！？」

「……」

光が収まりなんだか聞き覚えのある不快な声を耳にして、気分が一気に落ちる。先程まで魂のみだったために身体がやや動かしづらいが……まあ動けない事はないので倒れていた身体を起こすと、真ん中に一つ赤い宝石の付いた黒い金属製の細いリングが手首についていた。これがヘファエストス様のくれた腕輪だろうか。だがとにかく今は現状確認、叫んでいる龍也を無視しながら周りを見る。

目の前には純白のドレスを着た金髪ロングの美少女が祈るようにひざまずき、その周りには甲冑に身を包みハルバートを持った兵士達、そしてローブを着こんだ髭の長いじいさんが捻れた木の杖を持って

いる。おお……ヘファエストス様の言う通りファンタジーだな。

「勇者様が……二人？」

じっくりと観察していると、金髪美少女が戸惑った様に口を開く。するとそれを皮切りに周りの兵士達とかも戸惑い出した。まあ本来呼び出すはずの勇者は一人らしいし、驚くのは無理もないだろう。

「どういうことだ？」

「前例がないぞ？」

ざわざわとざわめきだす周囲を眺めていると、それまで何も言わなかったじいさんと目があつた。向こうはこちらを敵しい目で見てくるが、俺は大の大人や召喚主が戸惑ってる今の状況がわかってるのが俺だけって事が無性におかしく感じて顔が歪に歪む。それにじいさんは目を見開いていた。昔から少し笑うとこんな感じになっちゃうんだよ……どこの悪役かつての。

「おい！どういうことだよこれは！それに海人！お前も何でここに
いるんだよ！？お前は……」

そんな風に考えていると、龍也が肩を掴んでくる。気持ちにはわから

んでもない。死んでいるはずの人間が一緒にいるんだから……しかし、俺はもうこいつと一緒にいる気はない。というか、正直なところ今でさえハデス様の言っていた様にキレてしまいそうになる。それでも何もしないのはこの世界の事がよくわかっていない今、動くのは得策ではないからだ。こいつを殺すのは構わない。しかし、これから先どうなるにしろ動きづらくなってしまふのは確実なはず。下手して勇者になんかされたら目も当てられない。故に、そういう事をするのは愚策も愚策だ。やられたらやりかえすけど。

「……その君、状況を説明してくれ」

俺は龍也の手を払いのけ、目の前の美少女に問う。龍也が啞然としているようだが、知ったことか。いずれはこいつと同じ何かしらに巻き込まれるだろうが、その時まで……いや、それからこっちはやりたいようにやってやる。

「え？あの「気にするな。いいから」あ、はい。えっと――」

気まずそうに口を開いてくるが、それを遮って言うとはたかという感じで説明をします。つまりはよくあるファンタジー小説と同じだ。魔王が出たから助けてください勇者様、ということ。しかも伝統を尊ぶこの国と敵対する実力主義の国や他の商業の国などの圧力もあり、とにかく助けてくださいと言ってきた。魔王はともかく、国同士の争いとか勝手にやってるって話だよな。それになんだか話の節々で色々とおかしいところもあるし。特に国の話でやけに自国を強調して他国を貶してたけど……あれ？もしかしてこの国ヤバイ？

その際龍也が力が無いだの何だの言ってたが、異世界召喚補正で身体能力だの魔力だのがつくから大丈夫とのこと。その時の龍也のホツとした笑顔で彼女が落ちていたのはテンプレだ。正直あれだけで何とかなるのが訳が分からん。しかし勇者二人は前例が無いとかで、一先ず国王の所に連れてくらしい。十中八九龍也が選ばれて、ヘフアエスト様の言ってた通り俺には何かしら起きるだろう。どんなものが来ても負けるつもりはないが。

「——では、案内しますのでついてきて下さい」

彼女がそう言うと、俺と龍也の両隣を兵士で固められる。勿論姫っぱい美少女は龍也の隣だ。そこで龍也は何か言いたげな目で見てくるが他には特に何も考えてないようだ。しかし、これ明らかに脅しだろ？下手な真似はするなよっていう。特に俺への。

「……やっぱりアホか」

歩きながら思わずボソリと呟くと、少し前にいたじいさんとまた目があった。チラチラ探ってやがるようだが……何の能力も使用していない現在は、身体能力が高い普通の高校生だ。あとは魔力？が多いかもしれないけど、それは異世界召喚補正とかで解決できるはず。多分大丈夫なはず……まあ、楽観的ではあるかもだけど。

「さあ、つきましたよ」

彼女が言うと、扉の前にいた兵士が扉を開く。どうやら考えてるうちについたようだ。そして中に入ると、赤い絨毯のひかれた階段の上の玉座にふんぞり返ってる座っている王様、周りには位の高いと思われる人間が多数。中は嫌な空気ではいっばいだ。

「おお……アリア。その者達は？」

「実は――」

かくかくしかじかと説明する彼女ことアリア。こうやって普通に話してる事から、やはりこの国の姫だろう。そして話が終わるとやっぱりテンプレな展開で魔王がとか我が国の危機だのとあくびが出てしまうほどに長々と話した後、俺と龍也を一度交互に見て、今度は龍也だけに目を向けて言った。

「勇者リュウヤよ、やってくれるな？」

「魔王がこの世界の皆を苦しめていて、その魔王を俺しか倒せないって言うんなら……うん！皆を守るためだ！謹んでお受けいたします！」

「うむ！では下がちなさい！今日はしっかりと休むと良い」

俺がいるにも関わらずトントン拍子で話が進み、龍也はしかもそれを受けて俺を忘れて出ていきやがった。本当にこいつの頭はどうかしてるに違いない。というか、元の世界の家族とか取り巻きとかいろいろ知り合いはほっといていいんだろうか？特に家族。

「……で？俺が残されたってことは、勇者は二人もいないと？」

「ほう、察しがよいではないか」

俺が言えば先程までの優しい親父はどこへやら。目付きからなにもで全てを変えて、見下した感じに言ってくる。見渡すと全員同じ顔をしており、皆一様に自分の利権を第一にするような腐った目をしてやがる。ざっと見てあのじいさんはいないが、騎士甲冑を着こんだ隊長格らしき人間までそうなのだから呆れしか出てこない。

「では、俺にどうしろと？」

「即刻この国から出ていき、二度と立ち寄るな。本来ならば先程のリユウヤとかいう正義馬鹿だけでよかったのだ。お前はいらん。儂の気まぐれとはいえ、殺されないだけ有難いと思え。幸いなことにお前をあやつは意に介していなかったようだから、理由などどうとでもなろう。無論、アリアには気づかれぬようにな」

「……」

入国禁止までいくか……なるほど。他の人にとってはどうかは知らないが、俺にとっては思っていた以上にヤバい国みたいだ。即行で殺さないのはたかが異世界人一人となめているんだろう。事実、龍也は運動神経は良いものの、こと喧嘩に関しては雑魚だった。しかも平和ボケしている日本人とくれば、この世界ではほっとけば自然と野たれ死ぬのが正解だ。ここで殺すのも外に何も持たせず頼り出すのも大差ないだろう。生き物を殺すことは小さいころからいけな
い事と、半ば洗脳のように教え込み、一昔前までは多かった殴り合いの喧嘩等もめつきり減って、何だかんだと難癖をつけられる。そのくせ陰湿な物が増えた。海外ではどうかは知らないけど、とりあえず日本では、俺の周りにはこんなのばかりだった。おもにアイツが面倒事を持ってきて、対処するのが俺だったわけだけど。幸か不幸か、そのおかげで人間の汚い所が少しは理解できたと思う。

が、しかし、俺は普通の日本人、ましてや異世界人とは違う。ありふれた不幸だとは思うけど、それでも俺はかなり苦労してきた。水道やガスが止められるなんて毎回だったし、高校に入学してからの入院費がかなりのもので、食事がないこともざらだった。そんな中で娯楽な物は買えるわけもなく、近所の羽振りのいい成金のお兄さんによりいろいろと手に入れていた。かなり飽きやすく新しいもの好きな人で、ゲームや漫画類はすべてこの人からもらったものだったりする。

「僕は金持ちだから、これやるよ。最新機種買ったからさあ
く……僕お金持ちだし？お前と違って家族にも恵まれてるし？株で
大儲けしてるし？ハハハハハ！」

こんな風にいちいちに自分が金持ちか、いかに自分が優れてい
るかを自慢してくるめちやくちやうざい人だったが、ただ物をく
れるから大して気にしていなかった。まあ、見下して良い気持ちに
なっていたんだろう事はあの人の目を見ればわかる。周りに自分は
優しいって言いまわっていたからそれももくてきだったんだろう。
やりかたは俺に得しかなかったけども。

閑話休題

とにかく、だ。俺は別に国外追放されても大丈夫ってことだ。食料
面が心配だが、そこはテンプレ。ギルドとかあるだろう。無いなら
無いでその時考える。情報が無い今はそうするしかない。

「……わかりましたよ国王様。ならば即刻立ち去るとしましょう。
では失礼」

「ほう、存外物分かりが良いではないか。では疾くと去れ」

てめえに誉められても嬉しくも何ともないわ！と思いつながらもさっ
き言ったように動く時ではないので我慢する。正直言えばこのまま

腕輪から剣出して奴らの腹をかつさばいて臓物を引きずり出した後、死ぬまで火であぶってやりたい。あと晒し首。

そんな事を考えながら、俺は王に背を向けて扉へと進んだ。

一話（後書き）

結構変えました。今回はカイト君には申し訳ないですが大人しく引いてもらいました。性格云々とかは後のお話で解決します。

作者の偏見や個人的な意見など多く含めているので変に思えたなら申し訳ないです。

何故すぐに復讐しない！？とかの感想に対応しているつもりです。

二話（前書き）

大変お待たせしました！本当に申し訳ないです。

二話

扉横にいた兵士に睨まれながら謁見の間を後にした俺は、とりあえず王の言うようにここから出るために歩き出した。永遠と続くように長い廊下一面に敷かれている赤い絨毯を踏みしめながら、ひとまずこの新しい身体のスペックを脳内で確認開始。

ヘラクレス様により強化されたこの肉体は、重装歩兵の鎧を殴って貫通出来るだけの筋力と、鈍器等の衝撃系には特に耐性のある強固な肉体防御力。あとは持っている能力に負けないといったつくりになっている。そしておまけとして半径1kmは生き物の気配を察知することが可能で、個人の完全特定は流石にできないものの、意識することで目標を感じ取ることは可能みたいだ。しかしそれは一度出逢った事があり、尚且つその人の気配を覚えているのならでないとであり、他の者にはどこら辺にいるのか、敵意はあるかの察知等になる。これだけでも大概チートだけでも。ちなみに察知出来るからといって全体に意識を向けることは今はやらない方がよさそう。量にもよるけど、それだけで下手をすれば頭がイカれかねん。徐々に馴れていけば大丈夫になる可能性はあるようだけでも。

次に、これらの事を理解させてくれるメティス様の知識及びそれらに負けない脳だ。これはメティス様が言っていたように能力をどう使えばいいかや、この世界での魔法についての全ての知識、魔導具造りの技術もある。魔導具とは魔法の術式の込められた道具の事だ。これは術者によって術式は変わるし、効果も様々で使い勝手はいいものの強力な物になると非常に高度な知識や技術を用いるため数があまり多くないそう。それら魔法を使うために俺自身の魔力も多

くしてあるそうだから、それらを使うのに不便することはほとんど無いだろう。ちなみにこれらの知識は頭の中で検索するようにして探し当てる。こうするにはどうすればいいかという風に思えばその知識が出てくるし、知識の中にある単語等が会話とかで出てくれば思い出すようにして俺の正式な記憶として残る。つまり、えーっと……と考えればいい訳だ。

「おお、ここにおられたか。探しましたぞ」

「ん？」

とりあえず二つの能力確認を終えたあたりで、T字の廊下つきあたりで俺が曲がろうとしたのと反対側から聞き覚えのある声により思考と足を止める。振り向くと護衛らしき兵士、いや、騎士を二人連れたあの召喚時に俺を見ていたじいさんがいた。手には変わらず長い木の杖を持ち、某魔法学校の校長先生を彷彿させる長い髭と優しい顔をしているが、その瞳の奥には未だにこちらを見極めんとする意思と長い年月の賜物である鋭い眼力を感じる。両隣にいる騎士も恐らく腕が立つのだろう。こちらを油断無く見やり、いつでも剣を抜くことの出来る体勢だ。

「何か？生憎と、この国を即刻立ち去れとの王命でしてね」

「なんと……王は貴殿にその様なことをのたまったのか……！」

ポケットに手をつつこんでため息を吐きながら言う俺に、じいさんは額に手を置いて天を仰いだ。横にいる騎士達も苦虫をつぶしたような顔をしていることから、どうやらじいさんは俺をこの国に留めたいらしい事がうかがえる。派閥的なのはやっぱりあるらしい。もつとも、残る気なんてさらさらないんだけども。

「はあ……それは、謁見の間にて重役達の前で言われたのじゃろっな。となれば覆す事は出来ぬか」

「オルグレン様、どうするにせよここでは……」

「そうじゃのう……したらば貴殿について来てもらいたい所がある。危害を加える事は勿論無いし、安全は保証しよう。どうかついて来てもらえぬか？」

ふむ、じいさんに嘘を言っている感じはない。それにどちらかと言えば交渉より懇願に近い。まあ、横の騎士達は早くしろって感じで見てくるが。

俺は考える素振りを見せながら腕を隠しつつ、念のために両手にアサシンクリード？に出るアサシンブレードを装備する。これは手の部分の無い籠手のような外見で、手首を捻ると隠しナイフが飛び出す暗器だ。毒もつけれるし、ブレードを火薬で飛ばして銃のようにする事も可能という優れもの。しかも今俺は学ラン姿なのでアサシ

ンブレードが見える事はない。いい感じでピッタリだったから、触られる事さえ無ければ大丈夫だ。

「……わかりました。危害を加えないと仰るなら、信じましょう」

「おお、そうかそうか。ならば、急がねばなるまいの。時間は余りない」

俺が返事をする、じいさんはやけに嬉しそうに頷き、歩き出した。俺の両横に騎士をつけて何だか隠すようにして移動をしていく。絶好の暗殺ポジションだなあなんて考えてしまっ自分自身に、疑問を感じながら。

しばらく似たような場所を右へ左へと曲がりながらついて行くと、じいさんは他より少し豪勢な扉の前で足を止めた。その両側にも扉番があり、一言二言じいさんが話すと扉を開けてくれる。

「よいか、くれぐれも粗相の無いようにな」

誰かもわからずにそんな事言われてもって感じだったが、頷いてじいさんと共に中に入る。すると中には甲冑を着た横の騎士とはまた違う風貌の騎士風の護衛が数名と、中心でテーブルを挟んで座る綺麗な紫色の髪でドレスを着た女性、そしてそっくりだが若干薄い髪色をした少女が人形——頭から釘が生えて目玉と腸が飛び出た布製——を抱きしめていた。騎士がいてドレスを着こんで上品な格好とくればよっぽど位の高い貴族、もしくは王族だろう。王のいる城にいる以上後者の確立が一番高いわけだけど。とりあえず、じいさんがひざを突いているので頭を下げておく。俺はこの人に忠誠を誓っているわけではないからな。そこら辺は許容してもらおう。

「頭をお上げ下さい、勇者様」

「はっ」

「……急な呼び出しを受けていただき、感謝します。そして現王とその取り巻きの短慮な命令について謝罪させてもらいます」

顔を上げると女性はピクリと眉を動かして少し間が空いたものの、少し頭を下げた。同様に周りの人達もしている事からやっぱりあの人をトップにした派閥で決まりだろう。護衛の顔はしぶしぶといった感じではあるけれども。

「いえ、お気になさらず。自分は用意が出来次第ここから出るつもりでしたので……その準備が全く出来てはおりませんがね」

「そう、ですか……まあ、王命が出された以上もしもの話をしても致し方ありませんね」

俺がそう言うのと、彼女は眉を下げて残念そうな顔をする……この顔にまで不信感を抱いてしまうのに内心嫌悪感を感じてしまう。警戒するのは最もではあるが、どうしても過ぎてしまう。こちら辺は追々治していくしかないかな。まあでもぶっちゃけ同情するなら金をくල්って感じだけでも。

「今回お呼びしたのは他でもありません。何もかもが無い状態のあなたに物資を提供するためです。袋には簡易ですが空間系の魔術がかかっていますし、これで少なくとも一週間、そして中の金貨を使えばとりあえず当面は保つでしょう」

彼女の言葉と共に騎士に渡された革袋には干し肉などの保存に優れた食料と革の水筒がいくつか。そして金貨・銀貨・銅貨・鉄貨（鉛色の小さな硬貨なので仮称だが）が10枚ずつ入っていた。

「ありがとうございます……しかし、どうして私のような者にここまで施しを？」

「私達の勝手な都合による呼び出しについての謝罪……と言ってもあなたは信じないでしょうね。あなたは疑い深いし、残忍な心の持ち主であるけど、人の痛みがわかるとても優しい人。だから本当の事を言わないと、私達を信じてくれないでしょう。ふふっ、そんなに怖い顔しないで？私、人一倍観察眼があるみたいなの」

顔に出ていたらしい事を言われて目頭を揉んで顔を戻す。そんな笑顔で観察眼が凄いとかわれても……ここまで来ると化け物じみてるぞ。未だにジッと見てくる少女と相まってかなり怖い。というか、流れを向こう側に変えられたか……というかいきなりフレンドリーになったぞ。彼女の立場的な発言はとりあえず終了ということか。

「本当はオルグレン爺があなたはもう1人よりも私達に利を生むだろうから引き入れておこうって話だったの。現王派に1人ついてしまったも同然だけど仲も悪いみたいだし、勇者の力への対抗策は同じ勇者の力しかないもの。でも先手を打たれてしまったし、どうしようかとは思っていたけれど……なかなかどうして、あなたには大きなナニかを感じるの。だからこれは、私の気持ちと素直に思ってくれて良いわ」

先行投資とも言うけどね、と笑顔で言う彼女に拍子抜けしてしまう。

この言葉の裏に何かある可能性も捨てきれないが、とりあえず嘘をついてるようには思えなかった。もし本当だとしたら、派閥のトップとして良いのかとひどく気になるけども。

「……なる程。まあどのような理由であれ、私はこれを拒否する権利も状態でもないですからね。素直に受け取っておきます。ありがとうございました」お話の最中失礼します。シャーリー様、こちらに現王派の勇者達が来っていると監視の者からの報告です」……」

話を遮られる形で、扉の前にいた兵士が焦りながらも静かに入ってきて女性——シャーリーさん——に報告し、一礼してから出て行った。すると騎士達は少し焦ったように、女性と爺さん——オルグレン？爺さん——は苦虫を噛み潰したような顔をする。ちなみに少女は変わらずこちらに目を向けている。見返すとビクンツと震えて人形を抱きしめる強さが増しているみたいけども……地味に精神ダメージがくるぞ。

「くそつ、もうバレたかの？目と耳は無いし、誰にも見られる事もなかったはずじゃ。いくらなんでも早過ぎる」

辺りが静かに慌ただしくなる中、オルグレン爺さんが真剣な顔立ちで俺の前に来た。左右には騎士がいて、相も変わらず警戒態勢だね。まあ当たり前なんだけど。

「すまんが、これからお主を略式の転移魔法によって飛ばす。かの

勇者にわしらが一緒に居る所を見られるのは些か都合が悪いでの。場所は二つの大きなドワーフの領土のうち比較的平穏なほうで、知り合いのドワーフが住んでいる所の近くじゃ。もう片方は日々地下回廊からの魔物の軍勢と戦っているところじゃがお主にはしばらく関係ないじゃろう。名をベイレンという鍛冶馬鹿じゃから、近くのドワーフにでも聞けばすぐにわかるじゃろう」

オルグレン爺さんは俺の返事を聞くまでも無く早口に呪文を詠唱し始める。ここで俺が何を言っても駄目だろうし、俺自身もアレには会いたくないから詠唱を中断させるようなことはしない。状況的にもこの人達に迷惑かけるだけだからな。

なのでその間に俺は腕輪からシャーリーさんと横に居る少女にお礼も兼ねてプレゼントを用意することにする。金は街に入ればどうとでも出来たかもしれないがあつて損はないし、下手をすればこのまま手ぶらで移動しなければいけなかったんだからお礼はきちんとしてないとな。時間がないから二人だけだ。まずはシャーリーさんにはFF13よりシヴァ姉妹の入ったクリスタルだ。設定や機能は無理ない程度でいくらか弄れたので、彼女と俺にのみ発動でき、しかも彼女に危機が迫れば自動的に彼女の元に来るという最高のガードマンにした。ルシじゃないけどそこらは割愛。見た目は普通の宝石だから彼女が持っていてもらな不思議がられることも無いだろうからね。

「準備できたぞい。これからすぐにお主を飛ばすが……準備は良いかの？」

「少し、待つていただきたい。お礼の品をと思いましてね。まずはあなたにはこれを。御身が危険になりましたらこれを砕いてください。彼女達が守ってくれる事でしょう。一度安全な場所で会っておくのも良いかもしれませんかね」

「彼女達？」

「それはご自分の目でご確認を。次は退屈な話を我慢してくれていたあの子にはこの子プレゼントします。優しくしてあげてください。そうすればこの子が守ってくれるでしょう」

次に少女、おそらく娘さんには『アカメが斬る！！』より帝具のヘカトンケイルだ。これは適合者の指示、危機的状況、もしくは敵対者の攻撃などになると巨大化して戦う生物型帝具。普段は小さなぬいぐるみのような姿をしているが戦いでは巨大化して獲物を捕食する。また、さらに戦闘能力を上げ強烈な咆哮によって敵の動きを止める「おくのて狂化」もあるが、使用するとオーバーヒートで数か月動けなくなる。生物型帝具の特徴として、体のどこかにある核を破壊しない限りいかなる破壊からも再生し毒物なども効かない、高い耐久力を誇る。しかし自律行動が前提であるため、使用者とのコンビネーションが必須だ。これは追々頑張ってもらえない。

元々の帝具の設定として1000年前、帝国を築いた始皇帝の命により造られた48の超兵器であり、体力、精神力を著しく消耗する

がその性能は強大で、帝具の所有者同士が戦えば必ずどちらかが死ぬと言われている。始皇帝の「ずっとこの国を守っていきたい」という願いのもとに開発されたが、開発から500年後の内乱により半数近くが行方不明となっている。使用者が帝具へ抱いた第一印象が相性に左右するらしい。しかしクリスタルと同じく設定はいじれたので消耗する体力等は極力少なくして、魔力も代行して使えるようにしてあるし、ある程度は俺の命令も聞く。あとはこの子がどう感じるかにあるんだが――。

「……！」

――なんか互いに見つめあった後に抱きしめ合っているので大丈夫だろう。周りは俺が何処からともなく出したこれらに唖然としているけど、俺は無視してオルグレン爺さんに話しかける。目の前には青白く光る魔法陣があって、メティス様の知識によればこれはかなり高度な術式らしい。少しでもミスがあると、指定の場所ではなく、キーワードの該当する場所にランダムに飛んだり、いきなりドラゴンの巣の中だったりするらしい。

「終わりました。では、この陣に入ればいいのですか？」

「う、うむ。あれらについて詳しく聞きたいが、時間がない。海が近いきれいな場所じゃからしばらくそこでこの世界に馴れるよう頑張るのじゃぞ？では、転移！……あっ！！ちょ、待つ」

盛大に不安をあおる声と共に、俺は転移した。

二話（後書き）

かなり話をかえましたし、上手く書けてるか不安です。ってか、ごちやごちやしましたね……。

三話（前書き）

今回少し短いです

三話

「疾っ！」

「ギヤアアア……！」

転移陣でオルグレン爺さんの焦った声を聞いてから早一週間が過ぎた。いきなりすぎているだろうとは思うが、それだけ大変だったのだから仕方がない。

まず第一に、俺が転移によって飛ばされた場所はオルグレン爺さんが言っていた場所ではなかった。彼の話だと海が近いとの事だったが、俺の周り一面に広がるのは岩・岩・岩！たまにある開けた場所には断崖絶壁に加えてその下には溶岩らしき物がドロドロと流れている。しかも溶岩の滝なんて物もあって、暑いし眩しいしでどうにもならないけども、このおかげで周りの明るさが保たれているのだから何とも言えない……というか、どう考えても話に出てた地下回廊だ。

「ぬんっ！」

「グペあつ！」

更に、この地下回廊はどういうわけかひっきりなしに知識の中にある魔物と呼ばれるヤツらが襲いかかってくる。最初はそうでもなかったんだが、探索と出口調査のために進むたびに数が増えていった。今じゃあろくに寝る暇も無い。おかげで現在進行形で徹夜中だ。しかも2徹目。能力でドラッグオンドラグーンに出てくる青いラインの入ったハンドガード付きの長剣であるカイムの剣をレベル1の状態を出して、先程から鎧を着込んだ肌が真っ赤でしわだらけの醜悪な顔立ちの人型の魔物を斬り捨てている最中だ。殺しがどうこうとか言うことはない。ヤツらは俺を殺そうとしていて、俺は死にたくない。だから殺す。完膚なきまでに、例えヤツらが人間であつたとしてもそれは変わることはない。

「カアツ！！！」

「ぎゃっ」

返り血を全身に浴びながら他よりも豪勢な鎧と頭部に一本の角のような物が付いた兜を着た指揮官っぽいのが首を斬り落とす。こいつらの名前や種類は知らないが、どうやら軍隊のような階級制度らしい。さつきから部隊長のようなヤツやこの指揮官っぽいのが指示を出してたみたいだし。当然、何を言っているかはさっぱりだったけれども。

「はあ……はあ……ふう」

さっきのヤツで今回は最後だったみたいで、気配探知をしたあとに息をつく。今回合計で50強……ヤツらは人間の軍隊のように陣形を組んで来ないだけまだ良いと言える。鎧を着込み、自分たちで作ったのか奪ったのか、剣や槍と多彩な武器を持つ。一度だけ行軍？途中のヤツらを隠れて見た時は、精神的な疲れもあってかなりげんなりしたものだ。だって亜種らしき2m以上はあるだろう重装備で固めたヤツも何体かいたんだからな。数も下手すれば200はくだらなかったし、本当に手を出さないで良かったと思う。

「……眠れ、安らかに」

さて、とにかくにも戦闘は終わったから剥ぎ取りを開始しよう。これはこいつらをちゃんと殺しましたよという証明的な意味合いだ。これがあればもし何かしら報酬がある場合、ガッツリ儲けられるかな。まずは死者に対する黙祷を捧げた後、剥ぎ取る指揮官と部隊長の死体はきっちり真っ直ぐにしてから死体の手を合わせる。そうしてもう一度祈りを捧げてから、とりあえず指揮官と部隊長の特徴的な兜を腕輪の中に取り。人数編成は一定だったから、隊長格だけ持っていれば大丈夫だろう。上手く取れなくて中に生首入ってるけど、そこは許容範囲としてもらいたい。

そして、死者への最低限の礼儀を取るのは当たり前前の事だ。相手が生前どんなくそ野郎だったとしても、殺す理由と同じくこれは変わらない。アサシンクリードの中にもあるように、死んだらただの肉

塊だがそれがどんなモノだろうと俺の行動と精神は変わらないだろう……俺はアイツとは違う。

剥ぎ取りを終えた俺はそそくさとその場を離れる。血の匂いが充満しているここにいつまでもいると、匂いに誘われて次のヤツらか別の魔物が来かねないからだ。一度入れ替わりと言っても過言ではないタイミングで来たから今は気をつけている。

「あゝあ、こりゃ着替えないとな……もう着れないか」

血まみれでボロボロの学ランを摘んでみて、ぼそりと呟いた。この一週間腕輪から出した下着とYシャツは着替えてたけど、学ランは変えてないというか変えれなかった。おそらく俺が着たまま来たからだろうと思う。着替え自体は一瞬で終わるから、大した手間はか

からないがどこか寂しい所もある。正真正銘1つだけの俺のあの世界の思い出。たいしたものじゃないけど、それでもなんだかんだで着続けてきたのは俺にも未練があったのか、はたまた……どちらにせよ、こいつはもう使えない。血が染み渡りすぎているからだ。それにさっきの戦闘で余計ボロボロだし。

それから一時間ほど進んで開けた場所に出た俺は学ランを脱いで、流れている溶岩に投げた。これでもって前の世界への未練等を断ち切る意味も含めて、溶けて沈んでいく学ランを最後まで見続ける。そしてこの世界での生に改めて向き合う事を誓おう。これから俺はここで生きていき、ここで戦い、ここで死んでいこう。その過程でアイツが立ちふさがるというのなら、いやそうでなくともいつかは完膚なきまでに叩きのめし、アイツの周りの大切な物を全て壊したあと、ゆっくりと殺してやる。

「っらあ！ー！」

「ぎゃっー！」

全てが沈み込んだのを確認すると同時に、振り向きざまにアサシンブレードでもって後ろに忍び寄っていた先程の赤い人型の魔物の喉を突き刺して、蹴り飛ばすことで抜く。見れば俺の着ていた学ランの匂いに誘われたのか、それが目立つ場所にいた俺をたまたま見つけたのかは知らないが、また50を超えるだろうヤツらが集まってきた。

「これはこれは、感傷に浸る時間もらえないとはね……」

ぼそりとつぶやいて、腕輪からYシャツと学校指定のスラックスからアサシンクリード2に出てくる真つ黒なフード付きローブにブーツ、肩宛て等を付けたアルタイルの鎧に切り替える。左肩には腕を隠す程度のマントが付いており、他にも腰に長剣、ブーツに短剣、他の場所には投げナイフと見事なまでに暗殺用装備ではあるが、すぐ動きやすい。それに加えて氷属性と風属性の魔法によって魔導具のようにこの装備自体に簡易式の冷房の術式が付いているので暑さに関しては問題ない。なので俺は両手のアサシンブレードを出して、敵陣に駆ける。

「ハハハッ！」

喉元を突き、敵の攻撃を逆に利用して敵に攻撃し、武器を奪い、投げつけ、骨を砕き、頭を潰しながらとにかく殺しつくす。相手を殺す時の骨を砕き、肉を引き裂く感触がたまらない。上手く返り血を浴びずにくびり殺せた時はとてつもない達成感を感じるようになった。俺が壊れているとは思わない。この残忍性が元々の俺であるとは理解できる。きちんと理性もあるし、無差別にやることはない。頭の中はひどく冷静で、きちんと周りが見えている。でも、身体がたぎって笑いが止まらない。

「アハハハハハハハハハハッ……！」

ああ……楽しい。

三話（後書き）

あれ？どうしてこうなった……？

四話

S i d e 三人称

カロール・トルル。古代ドワーフの言葉で原初の石という意味を持つこの地下都市は、辺り一面を石に囲まれ、マグマの運河が流れている。この場所はかつて最初の先祖が生まれたと伝えられており、鍛冶と鉱石の神に愛されたドワーフに豊富な鉱石とそんな場所にさえも適応して進化した食料として栽培出来る特徴的な植物などをもたらしした。それらはカロール・トルル限定の特産品として知られている。さらにドワーフの小さくゴツい体躯に反しての器用な手先も相まって、鍛冶技術を進化させていくのにそれほど時間はかからなかった。

ドワーフ達はその技術で最高の武器や防具を作り上げた。アクセサリも言うまでもなく、地表の人間、エルフ、ドラゴニカ——龍と人を足した見た目——などの別の種族達に非常に好まれることになった。その見事な鍛冶技術でドワーフの右にでる者無しと言われたほどだった。そして各種族との貿易により蓄えた資源と資金で更なる発掘と人口の増加によって合計12の広大な地下都市、10の地上都市を作り上げた。

しかし、ここまでの繁栄を見せたドワーフ達も程なくして追い詰められることになる。

それは、鉱山資源確保のための地下回廊と呼ばれる洞窟から突如と

して魔物の軍勢が押し寄せてきたからだ。当時の記録書は現存しておらず、先祖のドワーフが発掘時に掘り当ててしまったのか、はたまた魔物の軍勢が狙って掘り進めて攻めてきたのかは定かではない。しかしそれによってドワーフ達の地下都市は次々と落とされていく事になる。

当然、ドワーフ達は反撃もした。王族を筆頭にしてその屈強な身体を持つドワーフの戦士達は日ごろから首都のコロシウムで鍛えた腕をもつてして魔物達を退け続けた。最初は戦線は拮抗したものの、絶えることのない魔物の軍勢にドワーフ達は日に日に劣勢に追い込まれていく。元々戦士の数はそこまで多くなかったのも災いし、この時点ですでに地下都市は半分が魔物に占拠されてしまっていた。しかし、その中でも尚あがこうとする者達の活躍と、地表の他の種族の友の助けを借りてなんとか魔物を退ける事に成功した。

それから四半世紀。未だ進行してくる魔物の軍勢に日々対抗する毎日が続いている。ドワーフ達は先祖の教訓を生かし、戦士達の育成に力を入れているとともに他種族との交流や援軍の協定も取り結んでいる。地底回廊が抜かれれば次は地表に確実に攻め込んでくるとわかっている他種族は、この協定に特に反論も無く賛成した。やや例外はあるとしても、防衛力は格段に上昇し、2つ地下都市の奪還にも成功している。それでも種族の数としてはドワーフが勝っているのはかつての名残と言えるだろう。

同時にこの魔物の群れは冒険者にとっては一攫千金のチャンスでもあった。都市にはいくつかのギルドが建てられ、多くの冒険者が集まるのと同じく帰ってくることもない。しかし、ここで上手く戦果

をあげられれば他国でも一目置かれるようになり、この国ではさ
なる栄誉が待っている。国としては魔物が減ってくれるのに異論は
ないし、人の出入りは国益につながるのだから大して気にかけて
はいない。入国の際に犯罪以外の魔物の襲撃については一切責任を
負わない旨の誓約書を書かせている。だがそれでもなお、冒険者の
数は増加の一途をたどっている。同時に犯罪者の数も増加傾向にあ
るのが最近の国の悩みではあるのだが。

そんな中、カロール・トルル地底回廊防衛線の最前線で珍しくほとん
ど何もない毎日がここ二週間で続いていた。普段であれば何処から
ともなく50は下らない数の魔物——通常冒険者が相手取る、もし
くは遭遇するのは多くても10——が部隊長格と共にほぼ定期的に
週一で攻め立ててくるのだ。願っても無い平穩ではあるが、交代制
で守っている兵士達にすれば不気味で仕方なかった。学者達は冒険
者により数が減ったのではないかと考えているのだが、ここ二週
間の間そこまで腕の立つ冒険者や人数は入っていない。入る前には
洞窟前の建物で——死んでも名だけは残るように——名前を書かな
ければ入るための通行証、もしくはギルドカード提示による許可証
がもらえないのですぐに調べられる。

都市では『一気に攻めてくるための、いわば嵐の前の静けさではな
いか』等と噂が飛び交っている。今では攻撃の前にと店を閉めだす
所まである有様だ。念のために兵士により警戒をするように国が出
した命令が変な方向にねじ曲がってしまったのだろう。この噂の流
れを早々止められないと悟った国は、最前線の兵士とギルドの冒険
者からなる偵察隊を地下回廊に派遣する事を決定した。数は合計1
0人編成。ドワーフ5人の国軍にエルフ2人、人間1人、アルマー
——平均身長120cm程度の見た目二足歩行の猫。索敵能力やト

ラップ解除など手先が器用で何故だか種族全員商売上手。戦闘能力は低い、その分『1パーティに1アルマー』と言われるほどにその道の能力と宝物発見能力は高い。男女の判断がしにくく、性器の有無か声の高さから判断することが多い——1人のパーティ、個人参加でウォルフアウンド——見た目は二足歩行の狼か犬。高い俊敏性と脚力、嗅覚、聴力を持つが同時に弱点にもなりうる。男女の判断はアルマー同様——1人だ。個々の能力は高く、X・SS・S・A・B・C・D・E・Fとランク分けされているギルドでも全員Bランク持ちと言う上級メンバーになる。

「……見事なまでに出くわさないな」

「にやあ……ざつと見てきた限りにやと、ここ近辺には姿がにやいにや」

辺りを警戒しつつ進んでいくも、まったくもって出くわすことがない。アルマーを偵察に出すも、結果は同じ。それがより一層彼らの不安をあおることになるのだが、そこは上級冒険者。長年の経験と実力によってそれらはすぐに心の内に沈められる。それからさらに歩き続けること一時間。警戒を怠ることなく突き進んでいたために多少の疲労感を覚えた彼らは、ようやく広げた場所に到着する。だが、一息つけると思うのもつかの間、辺りを漂う死臭に全員が顔をしかめた。

「ッ！……おいおい、どんだけ死んだよこりゃ」

「通りで連中が来ないわけだ。こりゃあざと見ても100は下らないぞ?」

辺り一面に敷き詰められるようにして広がる魔物の死体。真つ赤な肌にしわだらけの醜悪な顔つきをし、鎧と武器を使い軍としてやって来る人型のそれは、ガリアンと呼ばれている。地下都市に攻め込んでくる魔物の6割がガリアンだ。ランクは単体だとDランクに属するが、軍として一個小隊を相手取るとなればC→Bに上がる。さらにその中に指揮官クラスがあり、数が増えればAランク依頼として扱われることになる。基本的に軍として移動するために単体の依頼は少ないので、ガリアンの相手は大体Cランクの上位の者か、Bランクからになる。

「これは……見事に一突きで死んでいる。他の死体も急所を突いているものが多い」

「それに、奴ら自身の武器で死んでるのもいるわ。死に方から見ても腕をひねり上げてそのまま刺した様にしか見えない。もしこの数の混戦状態のままこれをやったのなら、相当な手練れとみて間違いないでしょうね。首ごと証明部位の兜が持ち去られてるんだから、冒険者じゃないかとは思っけど……」

「……もしかして、これ全部一人でやってのけたのかにゃー?」

「んな馬鹿な！この数だぞ？それこそSSランク位じゃねえとこんな芸当出来るわけねえよ。でも、そんな高ランク持ちが入った記録はなかったし、連続してこの場所で戦闘があったんじゃないの？」

「そうかう？」

それを踏まえて、この場所を見てみよう。周りには100以上のガリアンが横たわっており、中には部隊長クラス・指揮官クラスも見受けられる。証明部位となる首から上が持ち去られていることから高ランクの冒険者によるものではないかとエルフとアルマー、ウォルフアウンド、一部ドワーフは推理するも、他のメンバーはそんなはずはないと反論する。そしてこのまま話していても仕方がないと、しばらくの間死体や周辺の探索をするが、出てきたのは真新しい肉の骨らしきものと果物の芯だけ。とりあえず誰かがいるということにはわかったものの、それが地下都市や自分達に害を為すのか否かがわからない。そのため前に進もうとしたとき、ウォルフアウンドの耳と鼻がピクリと動いた。

「金属音と新しい血の匂い……何かが、いや、誰かが争っている？」

「……何も聞こえないぞ？本当か？」

「お主のような人間にはわからないだろうが、ウォルフアウンドの聴覚と嗅覚は信用に値する。そんなことも知らんのか？」

「し、知ってたさ！さ、さっさと行こうぜ！」

誤魔化すように即座に移動した人間の青年にドワーフ達とウォルフアウンドの男は軽くため息をついた。彼のパーティメンバーの三人はいつものことだと言わんばかりに少しばかり気恥ずかしそうにながらもそれに着いていく。なんだかなあ、と今までの雰囲気崩された様に感じつつ、一同は小走りで移動を開始した。

四話（後書き）

今回は説明回でしたね。

次回は、まだ三人称ですが、お待ちかねのカイト君無双回です（笑）

五話（前書き）

遅くなつてすいません。

あれ？なんでこうなつた？

五話

「……」

ウォルフアウンドを先頭にして進むこと数分。またもや別の開けた場所に出た一同は、開いた口が塞がらないといった具合に呆然としていた。彼らは入り口の岩場に身を隠し、改めて中を見る。

中に居るのは一面に広がる裕に200はいるだろうガリアンの群れだ。小隊ごとに集まっており、一段上にいる指揮官クラスの演説？の様なものを聞いているようだ。指揮官は身振り手振りしながら感情的に、兵士にわかりやすいように動きながらしゃべる。そして何やらフードの様なものを付けた人間の死体入り案山子を指さしてさらにしゃべる。すると兵士クラスのガリアンから怒号の様な激しい鳴き声が次々と上がり、指揮官はそれを聞いて頷いた後に案山子を斬った。まるであれが復讐相手でもあるような、極悪人であるような、そのように見えた偵察隊メンバー。もちろん偵察隊メンバーからすればあんな数相手取れるわけないし、何を言っているのかさっぱりなのではあるが。

「何だあれ？気分が悪くなるぜ」

「おそらく、あの案山子が手配書みたいな役割なんだろうよ。そいつはこんな軍勢を差し向けられるような事をこいつらにしでかしたってわけだ。俺らや他国が出す討伐隊みてえなもんだろう」

「ああ。やつらはあの案山子に並々ならぬ殺気を向けていた。騎士殿の言葉はあっているだろう」

「マジかよ……ん？」

未だ続いている演説を聞き流していると、ふと指揮官から少し離れた真上の所にある別の道に何やら動くモノがあると気付く人間の青年。それをメンバーに伝えと、一番目の良いエルフの弓使いがそれをしっかりと確認した。色は黒く、そこまでは溶岩の明かりが行きとどかないようで微妙に動いている事しか確認できない。しかも下からはせり上がった岩のせいで見る事ができないために下に居るガリアンは気づいていない。

「あれは……人？」

目を凝らして見たエルフの言葉に全員が驚愕する。何せここ最近、というか偵察が決定してからこの地下回廊は立ち入りが禁止されているのだ。そのため普通はここに自分たち以外の人間がいることは有り得ない。事前にあの戦闘跡を見ていたとしても、その驚きは大きい。

そして全員がその影を注視していると、影が動きを見せ、またもや全員が驚愕することになる。

「なっ!？」

「飛び降りやがった!」

影は指揮官の真上に飛び降り、エルフの目で確認すれば、首元に隠しナイフ——アサシンブレード——を突き刺していた。そして少しの間その死体に向き、死体の手を組んで綺麗に整えると、呆然としていたガリアンに向き直った。そこでようやく特徴的な亜人種ではないとわかった。見た目は真っ黒なローブにブーツ、チラリと見えた胸鎧などの最低限の防具とは逆の多彩な武器。顔はフードでわからないが、背格好から男だろうと判別する。

ガリアンはいきなりの指揮官の死によりほんの少しざわつくものの、すぐにそれが先程まで殺す話をしていたヤツだとわかり、攻撃を開始した。まずは最前列にいたガリアンが囲むように剣や槍を構える。そこから更に逃げ場を無くすように囲んでいき、離れた場所では弓隊が矢をつがえていた。

万人ならば死ぬことが確定しているその状態で、男が動いた。目の前にいるガリアンが斬りかかってくる前に懷まで入り込み、持ち手

ごとひねりあげてその剣で心臓を突き刺す。すぐさま横に動き、後ろから振り下ろされた剣を避け、振り下ろした状態のガリアンの頭を蹴り飛ばして自分の前でつかみあげると、ボウガンや弓隊の矢への盾にしつつ剣を奪って投げつける。槍が迫れば身を屈めて木製の柄を足で折り、刃を喉元に突き刺す。別の槍が来ればそれを奪って叩きつける。

まさに圧倒的だった。流れるように動く男は何度か攻撃を受けていたものの、それをすぐさま回復魔法で回復して攻撃してきたガリアンに何倍の威力をもってして文字通り叩き潰した。時間が経つほどにその攻撃性は増していき、ガリアンを両手に持って肉塊に変わるまで武器として振り回していたりもした。蹂躪、いや、虐殺と言っても良いかもしれない。現にメンバーはその圧倒的な強さに呆然としていたが、あまりの虐殺っぷりにエルフと人間の青年、ドワーフの騎士も数人奥で吐いている。他のメンバーはどこか羨望の眼差しを向けるウォルフアウンドを除いて顔をしかめていた。

それからしばらく自身の武器を使わずにガリアンの血肉を撒き散らしながら半数近くを減して戦い続けた男は、後ろから聞こえた風切り音に横っ飛びで回避する。すると今までいた所に巨大で無骨、どれだけの数を今まで殺したのかわからないが、血がこびりついている片刃の斧が叩きつけられていた。そこにいたガリアンは当然潰した空き缶のように潰れており、同時に地面にひびが入って陥没している事から威力の高さが伺える。

「あいつは『斧神』ヴェニスー！将軍クラスの賞金首までいやがったのか！」

「お、『斧神』だって！？上がってすぐだったとはいえ、SSランクをぶっ殺した大物じゃないか！」

『斧神』ヴェニス。巨大な斧を持ち、全身をどうやって作ったのかわからない真つ黒な最硬級のフルプレートアーマーをつけた全長3m以上の筋骨隆々なガリアンの上位種だ。ガリアンは軍隊同様の階級分けをされているが、將軍クラスは指揮官クラスの一つ上に当たる。他にも上に一つ二つあるのではないかと学者たちは議論をしているが、これ以上の目撃例が無いために定かではない。

將軍クラスは個体数こそ少ないものの、その分強力で個体差がある。そのため將軍クラスはヴェニスの名前と共に必ず二つ名が付けられる。これは『斧神』のように見た目や武器で判断する事が多いが、これらの二つ名はギルドの賞金首の魔物にも当てはめられる。倒してギルドに報告すれば賞金が入るが、その分強力だ。しかもこの『斧神』は戦いを好む傾向があり、先日Sランクから上がったばかりだったとはいえギルドランクSSの高ランカーを撃破したのだ。ある程度満足するか、自軍の兵士がいなくなれば戻っていくのだが、たまに現れた時には最前線兵達は一層死を覚悟しなければならないとされてきた。

『斧神』は男と相対し、唸るような声を上げると周りからガリアン達の下がっていく。ある程度まで下がると、ガリアン達は声を上げて武器を打ち鳴らし、どん、どん、と足音をたて始めた。さながら一騎打ちや決闘のようなその場所で『斧神』はそれを聞きながらス

ツと斧を男に向ける。するとそれを見た男——カイト——は周りをぐるりと見渡した後、黒髪をはためかせながらフードを邪魔だと言わんばかりに下げ、口元を裂けんばかりに狂ったような笑みに吊り上げつつ初めて腰の剣を抜き去った。

『斧神』は歓喜の声を上げた。『斧神』にとって闘争とは生を実感できる場所であり、最高の死に場所である。そのため『斧神』は戦意のない者には手を出さないし、手を出させない。反対に自分に向かってくる戦士達には全力をもって相手をする。自分のいる戦場を汚されるのを極端に嫌うのが『斧神』なのだ。SSランカーに対しても今と同じように一騎打ちの形を取ったし、他の強者との戦いにもそうだった。武道家・騎士道精神を持つ魔物としても『斧神』は有名だった。『斧神』とはそれに対する敬意も含んだ二つ名なのだ。

斧と首をくるりと回し、カイトと同時にゆっくりと相手を牽制しながら円を描くように回っていく。先程までうるさかった外野も静かになり、その行く末を見ていたが『斧神』の先手を取った動きによって再び騒がしくなる。『斧神』はその巨体に似合わぬスピードで一息に距離を詰め、横風には斧を振るうもカイトが横に回転しながら飛び跳ねる事で避けられる。しかしそのままの勢いで回りながら斧を真上から振り下ろす。これもまたカイトは着地と同時に『斧神』の足元に踏み込んで回避して『斧神』に連続して攻撃を加える。が、その最硬の鎧に阻まれてぎやりぎやりと火花を散らすだけに終わった。

カイトが舌打ちして一旦下がろうとするが、『斧神』はそれを許さずカイトの身体を掴み上げた。そしてぎちぎちと音を立てながら力

を込めていき、あまりの圧力に男は血を吐くと同時にカイトは地面を滑るようにしてなげつけられ、何度かバウンドした後には止まった。腕は別方向に曲がり、足からは骨が飛び出ている。さらに肩にはバウンドした時に刺さった剣が突き抜けている。周りのガリアンが雄たけびを上げ始めるが、『斧神』は未だ油断なくカイトを見据えていた。

「おいおい、ありゃあ死んじゃったな」

「開始早々の回避は凄いと思ったけど、やっぱり『斧神』には通用しなか「いや、まだだ」……え？」

ウォルフアウンドの言葉にメンバーが目を凝らすと、カイトから淡い光が溢れ出し、ぐちぐちと音をたてながら再生していく。それと同時にカイトは狂ったような笑い声をあげながら起き上がり、走り出した。

「アッハハハハハハハ！」

カイトは『斧神』が勢いよく連続で振り下ろした斧を避け、地面に突き刺さった斧を抜く一瞬の動きの止まった隙について接近する。更にガントレットの関節部分にある微妙な隙間をアサシンブレードで突き刺し、ぐると左手首をもぎ取る事に成功した。

「ゲウアアア！？」

まさか自分がこんな隙間から攻撃されるとは思ってもみなかった『斧神』は、斧を離すことなく傷口を押さえてしまう。事実、普通の剣では折れてしまうようなほんの小さな隙間なのだから。

しかし、カイトの攻撃は続く。『斧神』が傷口を押さえた時にはすでに動いており、次は足を、臍を、右目を、脇を、首を、次々に刺していった。最中に右手のアサシンブレードが折れてしまうも、フルプレートアーマーであれ、動かすためには最低限空けておかなければならない箇所をなお徹底して突き刺している。『斧神』は時折反撃するも、ひらりとカイトは避けてしまい、とうとう『斧神』は膝をついてしまった。

「か、勝ちやがった……」

「おいおいおい、マジかよ……」

メンバーは言わずもがな。周りにいたガリアンまでもがしばし呆然とするも、すぐにギヤアギヤアと声を出しながら『斧神』を守らんとカイトに攻撃をしようとした。が、それは『斧神』の一声で静まった。手出しをするなどいわんばかりのその迫力のある声に、ガリアン達は動きを止める。わずかに動き出そうとした者も『斧神』の殺気まで込めた睨みにひるんだ。それは離れた位置に居るメンバーも同じであり、その凄まじい殺気は延長線上にいた彼らの顔を青ざ

めさせた。ssランク超えのその力はBランクメンバーにはきつすぎたのだ。

そんな中でおも平然としていたカイトに『斧神』はその斧を差出した。それをしばし見つめた後に受け取り、2m以上はある斧を軽く数度振り回してみせる。それを見た『斧神』は満足げに頷くと、残った右手で兜を外し、カイトの胸に押し付けた。

するとどうだろう。今まで『斧神』が着ていた鎧は霧のようになって『斧神』の元を離れてカイトの付けている鉄のセスタスにまとわりついていく。そして銀色だったセスタスが真っ黒に染まり、甲の部分には棘が付いて全体に赤黒い血管のような模様が浮き出ている。更に防具部分が伸びてもはやガントレットと化した全体に模様が広がり終わると、バチバチと赤黒い電気を発していた。

その変化に驚くカイトだったが、呻く『斧神』を前に一旦頭を切り替え、斧を持ちあげる。すると『斧神』は素直に首を差出し、満足げな顔をしつつ首を落とされた。

五話（後書き）

いろいろとごちゃごちゃして我ながらわけわかんなくなった風に思
います。無双はできてんのかな？

とりあえず、カイト君強化回にもなっちゃいました。あれえ？

六話

なんかめちゃくちや強いやつと大群を相手取って身体をめちゃくちやにされながらも頑張って倒したライトです。正直、握りつぶされそうになった時はどうしようかと思ったぞ……。

あれから少し経って。周りにいた魔物は強いものの最後の制止？にしたがって素直に引いていった。怨むような目線をいくつも感じたものの、特に攻撃とかは無く本当に素直に。俺はそれを見送ってから全身を回復魔法で癒した。最後の無理やり加速は結構身体に負荷がかかってたみたいだったからな。節々が痛い。

そのあとはもらった斧を軽く振りまわしてみる。2m近くあるこれは刃が半分くらいまで広がっていてとにかく分厚い。それにこびりついて取れなさそうな血痕と根元の方にあるかびかびの肉っぽいもの。そしてよく見てみれば真っ黒に塗装されている持ち手には端から端まで術式が描かれているのがわかった。これは持ち主に筋力の恩恵を与えるものと持ち主しか持てない軽く呪いじみたもの、そして持ち主に合わせて徐々に成長・変化していくものだ。3つ目のものは今までの持ち主である魔物の性格が頑固というか愚直というか……まあそんな感じだったみたいでこんな無骨な形になったらしい。

ちなみにガントレットの方にも同じ術式が刻まれている。こっちは筋力じゃなくて状態異常に対する耐性をつけるものみたいだが。筋力ばかり上がるのもなんだし、これはこれで良いだろう。早速こっちは元の鎧から俺好きな悪魔みたいなものになってくれてるし、折

れたはずのアサシンブレードもより強化・修復してガントレットと
同化してるしな。

それと、持っていたアルタイルの剣は半ばから砕けるように折れて
いた。新たに腕輪から出すことも出来るが、せつかくの武器だから
これをしばらく主に使おうと思う。狭いところでは別の短剣とかを
使うけど、基本はこれだ。

「……眠れ、安らかに」

確認が終わったところで、首を落としたままの体勢の死体をゆつく
りと仰向けに倒して腕を組ませる。そして祈りを捧げた後、ガシャ
ガシャと鎧の音がしつかりと耳に聞こえてきたのを確認して、振り
向かずに声を出す。気配だけなら奇襲をかける前から気づいてたけ
ど。

「ようやく話せる相手みたいだが……何者だ？」

ピタリと立ち止まった音と共に振り返れば、そこその団体さんだ
った。俺より若くみえる人間の青年に耳の長い女が二人と二足歩行
の猫。筋肉の塊のような身体に立派な髭のちっこいおっさんが5人
それからなにやらジツと見てくる狼男と、まあファンタジーの代名
詞を集めたようなメンバーだ。

「待て待て。そうかつかするんじゃない。わしらは話し合いに來ただけで戦いにきたんじゃないからの」

一番前にいた茶色の髭のちっこいおっさんが手をあげて制止をかけてくる。俺としても唯一の脱出手段を失いたくないからよほどじゃなければどうこうする気はない。というか、これがオルグレン爺の言っていたドワーフという種族だろうか？もしそうなら映画とかで見たまんまになるな。

「わしらはカロール・トルルからこの地下回廊に出された偵察隊じゃ。ここ最近になつて頻繁に來ていたこ奴らがいつこうに姿を見せなかったからその原因を探りに來ていたんじゃない」

俺はドワーフの話を素直にしばらくの間聞いていた。情報がないから正しいのかどうかはわからないが、とりあえず信じないことにはどうにもならない。なので聞いた話をまとめてみると、国民がビビつててヤバいからとりあえず見て來いという命令で來てみれば俺がいたってことだ。国についても聞いてみたらしっかりと答えてくれた。

「なるほど。一連の騒動の原因は俺だな。軽く500は潰してるから、そのせいだろう。こちらとしても生きるためだったんだが、国に迷惑をかけたことについて深くお詫びする」

「いや、原因が戦争準備とかじゃなかったのじゃから良い。あの」

斧神』を倒すという戦果をあげておるのじゃからお偉いさん方も戦力に加えようと少し言う位で、他の罰則や無理強いなどはせんじやるう。個人意見としては、ギルドに加入してないならさっさとすることをお勧めするぞ」

「……わかった。戻り次第加入することにする」

ドワーフの言葉に頷いて、ため息をつく。また何やら面倒な事になりそうだ。国が関わっているなら余計にヤバそうではある。ドワーフ曰く、冒険者によって守られ、支えられている国であるし、『斧神』——あの強い奴——を倒すような人間に無理強いして暴れられたらそれこそシャレにならないために本当にしないだろうとのこと。ドワーフは基本、本当の強者には小細工しないんだとか。

「殊勝な考えじゃな。それで、今度はこっちから質問させてもらおうか。お主は何故ここに居る？それと、どうやって入ったのかも聞いておこう」

「はあ……話せば長くなる。この手紙を読んでくれ。違うドワーフ宛てだが、内容はすべてそこにあるらしい」

俺は腕輪からオルグレン爺からの手紙を差し出す。これは転移の際にもらった袋の中に入っていた物で、羊皮紙に走り書きされたメモと一緒にくるんで入れてあった。走り書きによると、オルグレン爺の友人宛てと俺の身分証明書用の手紙のらしい。そこには説明と真

実が書かれている。かばんの中身を確認している時に見つけて、その時にメモを読んだ。

ちなみに、国の手紙には特殊な暗号・印の魔法と真偽を判別させる技術がそれぞれの国で使われているため疑われる事はない。最も、この手紙が通用するのは彼の友人がいるか、同盟国だけだ。あの国はわりかし嫌われた国ということが自嘲気味にメモに書かれていた。

「……ふむ。王妃派のオルグレンからの証明書か。本物のようじゃし、これを持っていれば一応うちの国は大丈夫だろう。他国は知らんがな。まったく、あやつの転移魔法の下手さは相変わらずじゃのう」

「あの爺さんと知り合いなのか？」

「ああ。若いころに冒険者として各地を旅していたのじゃよ。そこに書いてある鍛冶馬鹿とあと数人でな。その時から魔法の才は秀でていて、一通り旅を終えてからあやつは故郷の宮廷魔導師になった。わしは同じく故郷の力ロール・トロルの騎士に……っと、話がそれたの。とにかくあやつは昔から転移魔法だけはへたくそなんじゃよ。まったく、あやつを知っているわしがここに偵察隊として送られてきていて良かったな」

はあ、とため息を吐きながらもどこか懐かしそうな顔をするドワーフ。口ではああ言っているが、本当に仲がよくて楽しい日々だった

んだろう。俺は読み終えた手紙を受け取り、腕輪に入れる。

「それじゃ、事情も聞けたことじゃし戻るとしようかの。お主も来てくれ。あぁと……」

「カイト。カイト・サザナミだ。あなたは？」

「珍しい名前じゃの。わしは長年カロル・トロルの騎士をしとるフアーガス・パラゾールじゃ。今回の偵察隊長を勤めておる。他の連中は道中で説明しよう。それでは、行くとするか」

ドワーフの言葉に頷いて、俺は彼らを先頭についていった。

七話（前書き）

短くてすいません

七話

あれから出口に向けて進むこと2日。2、3匹とのちよるい戦闘を何回かと自己紹介も全員と終えて、ようやく出口に着いた。聞くところによるとあそこ付近は結構深部に近いらしく、彼らも気が気でなかったそうだ。というか、俺が向かって歩いていった方向に帰ってくるわけだから、俺ってば深部にいたってことか？

「さあ、ついたぞカイト。これがカロール・トルルだ」

「……デカイな」

暗がりを抜けて出ていくと、まず最初に目につくのが溶岩の滝だ。地球のナイアガラの滝を彷彿させるそれは、そこまで勢いはないにしてもドロドロと下に流れ落ち、底の溶岩の運河に流れ込んでいる。規模も前に地下回廊で見た物よりかなりでかいし中々に幻想的ではあるけども、じっと見ていると目がチカチカしてきて、近くにいたとすれば暑くてたまらないだろう。そしてこの地下回廊からの出入り口は目の前に広がる石造りの住居を見渡せることからカロール・トルルの上部分にあるのだと思う。天井部分は見上げても見えないからかなり高く、それでいてぐるっと側面は削られてけっこう広い。

「なかなかいい所だろ？ちつとばかし暑いが、俺達冒険者にはここほど過ごしやすい所はねえよ」

横に来てにやりと笑うのは人間の青年、ジャック・ファウディヌスだ。空色のツンツン短髪に人懐っこそうな顔をした彼は同い年ということもあってか道中で真っ先に声をかけてきた。底抜けに明るく人を引っ張るのはうまいそうだが、少々ガキっぽい。悪い奴ではないのは確かなんだけど、もう少し成長してほしいというのは後ろのエルフ姉妹の言葉だ。彼の装備は長剣にしては厚みのある剣一本。間接部分を守る程度の防具を付けて、一撃で決めるかヒットアンドアウェイのどちらかが基本先方になっていた。

「はあ、確かに冒険者として活動するならもってこいだけど、私達エルフには相変わらずちょっときついわ」

「そうだね、私も同意見だよ。君のその格好で汗一つかかないのが不思議でならない」

その後ろのエルフの一人、ため息をついた方は姉のニーナ・フォーチュン。そして落ち着いた声を出した方が妹のカタリナ・フォーチュンだ。二人は双子で、顔つきがまったくもって一緒だが性格が見事に真逆だそう。姉は少々短気で癪癪を起してよくジャックと喧嘩するらしいが、妹は常に冷静で落ち着いており、それを解決できるのに毎回面白がって見ている。しかも姉は火属性と土属性の攻撃型魔術師で、妹は短剣と弓を使った典型的なアーチャーだ。初見で二人の判断をするには装備か、髪型の違いを見るしかないだろう。カタリナは肩までのショートで前髪を右に流している。対して姉のニーナは背中の中ほどまであるロングヘアーだ。

「まったくだにや。僕とロードランさんは毛があるせいでムシムシゴワゴワにや！羨ましいいったらありやしにやい！帰ったらブラッシングしにやきやにやよ……」

にやふう、と足元で似たようなため息をついたのはアイ……もとい、アルマーのノワール・キャトシルヴ。毛色は肌色で革製の鎧を着ている。人間の物とはやはり造りが違うようで、尻尾が動きやすくなっていたり革が柔らかく作ってある。そこに背負うようにして剣——俺から見れば短剣だが——をさしていて、腰には空間拡張の魔法がかかったポーチを付けている。このポーチは重量制限のある俺の腕輪のようなもので、彼はここに罫や小道具等を入れているそうだ。このポーチ自体は全員持っているそうだが、ノワールのは特別製で他のものよりも多く入るらしい。索敵と遊撃が仕事だし力もそんなにないから数で攻めているとか。

「そうだな。我ら獣人はこういう時に不便でしようがない」

そしてノワールの話にも出てきた狼の獣人であるウオルファウンドがヴォルク・フォルティス・カヴァリエーレ。毛色は黒く、目は赤い。身長180cmの俺より大きく、少しだけ見上げるので190cmはあるだろうその大きさに加えてがたいもいい。

鎧は兜以外黒いフルプレートで全身を覆ってはいるが、特注品だそうで軽量でいて強くしなやかな金属のため動きを阻害しないそうだ。武器は柄が手に合わせて太くなっているハルバート。前面の刃は前

三分の一まで広がって、刃の部分と付け根の境目に赤いラインが入っている。そして柄に何か術式が書かれているけど見ることは出来なかった。

「まあ種族が違えばそれぞれ思う所はあるじやろうが、わしらドワーフには大事な故郷じゃ。住めば都とはよく言ったものじゃが、お前さん等も早く慣れることじゃわい」

「はあ、結局それしか方法がないのよね。仕方がない、か……」

「私達エルフには早々慣れられるものではないがね。さ、いつまでも立ち止まってはいられないよ。早く行こうか。私としてもいつまでもこの状態でいたくない」

「それもそうだな。じゃあギルドに報告して、俺たちは解散ってことか」

「ああ。わしらはこいつをつれて報告をしないといけんがな」

そう言っただけで歩き出し、少し下り坂の舗装された道を下りていくこと数分。岩の壁に挟まれたそこそ広い一本道になっていたので何があるというでもなくギルドに到着した。ヴォルク曰く、これはもし魔物が進行してきた時の対策も兼ねているそう。下手に道が繋がっていると居住区に進行されかねないし、防衛が困難になるからだ

とか。それに居住区からならあの壁の上に上がれるからそこから弓なり魔法なりで迎撃もできる。ギルド自体も軽く要塞化しているそうなので本当の意味での最後の砦となる。まあ、普段使用するときには時折混雑するのが難点だそうだが。

そしてこのギルド。なんとその出入り口が金属製の門になっている。今回の騒動のためか閉まっているが、屋上部分は映画とかで見た城壁のようになっていて、他にも色々迎撃用装備が施されている。こういうのが好きな自分としてはじっくりと見てみたいが、今は無理なのでまた今度来るとしよう。

「戻ったぞ！開けてくれ！わしだ！ファーガスだ！」

ファーガスがそう大声で言うと、屋上に居た人達が動きだし、ギャリギャリと音を立てながら門が開きだす。そして全部ではなく人が二、三人通れる程度開くと、中から数人出てきた。

「よく戻ったな、ファーガス」

「おお！グスタフ！迎えに来てくれたのか！」

ファーガスが嬉しそうに手を振った先に居たのはファーガスと同じくらいだろっ歳の間人だ。浅黒い肌にきりつとした顔立ち、顔には皺が目立ち白髪をゆるいオールバックにしている。しかしそれが年

齡を感じさせるものではなく、威厳を感じさせるのに一役買っている。ようはダンディーなおじさんだ。鋭い目つきに眉間に寄った皺で小さい子が見たら泣きだしそうではあるけれども。

「で？戻ってきたということはこの2週間の静寂の原因を見つけてきたわけだな？」

「ああ。だがここでは話せん。とりあえずギルドの者に報酬を渡して、別の場所でになる」

「……そうか。ならばそうしよう」

周りをチラリと見てから言うファーマーガスにグスタフは頷き、とりあえず中に入るように言ってきた。俺は素直に頷き、兵士に囲まれながら中に入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9101t/>

異世界で生きる

2011年11月2日22時03分発行